

PM学会四国支部 2026年6月度研究会記録

日 時：2026年6月24日(水) 15:00～16:10

開催方法：オンライン開催

主 催：プロジェクトマネジメント学会四国支部

後 援：特定非営利活動法人 IT コーディネータ協会

講 師：北村 尊義氏（香川大学創造工学部准教授）

講 演：「鑑賞から観察に誘う仕掛けには何が必要か」

出席者：20名

内 容：鑑賞は「美や価値を味わうこと」、観察は「実態を知ること」が目的とされています。講師は映像制作や認知科学、対人コミュニケーションなどの大学教育現場において、受講生に作品を鑑賞させたのちに、実際にその鑑賞物をつくらせるなどの観察を促す講義を実践されています。その取り組みの研究事例を紹介していただきました。

講演後は、質疑応答が行われ、「まとまりとして認識する」や「欠落(足りない部分)に気づく」など対象を分解しながら理解する人間の認識の仕方はAI分析(画像分析など)と関係しているのではとの質問があり、北村尊義氏から「画像認識は、ヒトが何をどう認識しているのかというのを紐解いていく。自然言語処理など生成AIとかなり密接につながっていると認識している」などご回答をいただきました。

PM学会四国支部 6月研究会 (Teams会議)

02:06:33

視線の向け方が観察を変える

視線は「関心」のシグナル

他者の視線が向く先 → 自分も見たくなる
(共同注視 Joint Attention)

展示物に「向けられた視線」を演出する
(人物写真・キャラクター)

視線の方向が観察の出発点を決定する
目線の高さ・角度の設計で体験が変わる

「見られる」体験が観察を深める

作品内の人物と目が合う → 自分が主体になる感覚

アイトラッキング研究：観察者は「顔・目」を最初に注視する

視線設計は仕掛けになる

→ どこを最初に見せるかをデザインする

北村 尊義

以上